

149 永久宅後古墳

松江市山代町

立地

茶臼山^{ちやうすやま}の西麓にある。一帯に広がる台地上に所在し、山代二子塚古墳^{やましろうふたごづか}、山代方墳^{ほうふん}に隣接する。

時期

古墳時代終末期（7世紀前半）

発見と調査

横穴式石室が古くから開口していたため、1918年の梅原末治の報告や1924年の『島根縣史』4などで戦前からよく知られた古墳である。以前は、古墳の形状が円墳に見えたので、「山代円墳」とも言われていた。

遺跡の概要

墳丘 墳丘は後世に大きく削り取られており、規模や墳形については不明である。開口方向とほぼ平行に墳丘西部分が直線に伸びるとすると、方墳になる可能性がある。

石棺式石室^{せつかんしきせきしつ} 埋葬施設は浮石凝灰岩^{あらしまいし}（荒島石）製の石棺式石室で、墳丘が大きく削られたために露出し、現在、玄室と羨道の一部が残っている。玄室は奥行2.25m、幅2.5m、高さ約2mで、平面形はほぼ正方形となる。各壁とも切石一枚で構成しており、天井の形は家形に加工し、玄室内面は石材加工時のノミ痕（荒い工具痕）を丁寧に消して仕上げている。各壁とも、接合面に鍵の手状の段を設け（石室実測図参照）、互いに組み合う精巧な造りとなっている。

玄門は幅0.6m、高さ0.7mのやや縦長長方形に刳り抜かれ、外側には閉塞石を受ける刳り込みを設けている。

羨道は長さ1.92m、幅0.43mの床石1枚を残して失われている。玄門と羨道床石の加工状況から、羨道は幅2.4m、高さ1.3mと推定される。開口が古く、遺物は知られていない。

古墳の特徴と意義

石室は内部を丁寧に仕上げ、各石材の組合せも精巧で、意宇川下流域に所在する代表的な石棺式石室である。石室の開口が古く、副葬品は知られてはいないが、形態から石棺式石室の完成期のもので、石棺式石室としては新しい時期に分類される。永久宅後古墳の石室と同一の構造を採る雨乞山古墳^{あまごいやま}（松江市八雲町）や飯梨岩舟古墳^{いいなしいわふね}（安来市）が同時期に造られており、このことから、同じ葬送儀礼をもつ勢力がほぼ現在の松江市域から飯梨川（安来市）左岸部一帯の広範囲に存在し、永久宅後古墳の被葬者を頂点とする階層構造が存在したと考えられている。

また、永久宅後古墳は、大庭鶏塚古墳^{おおばにわとりづか}、山代二子塚古墳^{やましろうふたごづか}、山代方墳^{ほうふん}と続く山代・大庭古墳群の最後に位置付けられ、出雲東部の最高首長の墓所と考えられる。

（西尾克己）

参考文献

野津左馬之助1924『島根縣史』4 古墳 島根縣内務部島根縣史編纂掛、島根県教育委員会1963『島根の文化財』第3集、島根県教育委員会1968『島根県文化財調査報告書』第5集、出雲考古学研究会1987『石棺式石室の研究 古代の出雲を考える6』



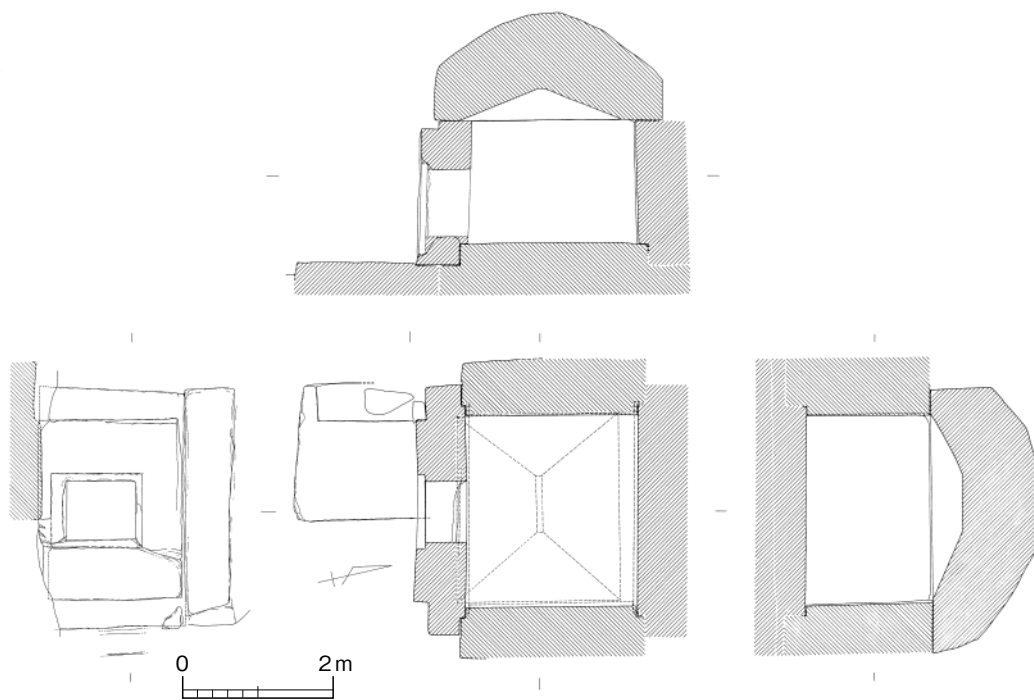
（松江）



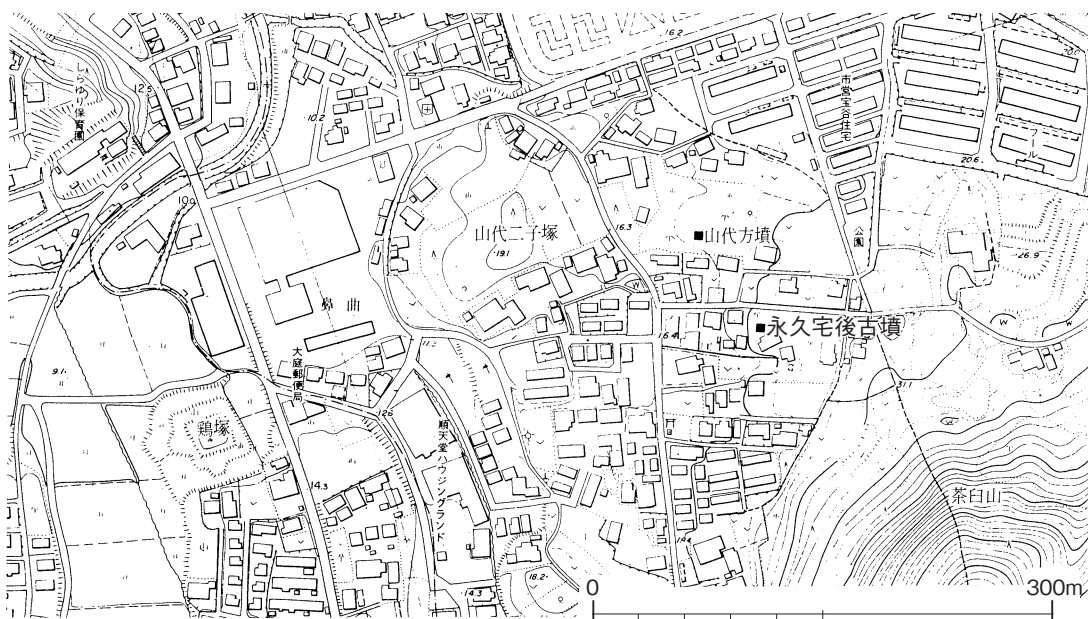
永久宅後古墳石室



石室内部（天井部）（出雲考古学研究会提供）



永久宅後古墳石室実測図（S=1:100）（『石棺式石室の研究』より）



山代・大庭古墳群周辺地形図（S=1:5000）